

自由社会の哲学 (2)

吉 澤 昌 恭

第三章 社会改良の方法

I 批判的合理主義

ポパーは合理主義者であり、非合理主義や神がかり哲学を厳しく断罪する。ただ、ポパーは合理主義を手放しで正当化してはおらず、合理主義をとるに際して、一定の留保条件を付けている。彼の合理主義は批判的合理主義 (critical rationalism) と呼び得るものである。合理主義や非合理主義に対するポパーの態度は、「神がかり哲学と理性への反逆」と題された、『自由社会の哲学とその論敵』の第二十四章で明らかにされている。

合理主義と非合理主義との間の論争は古くから存在し、ギリシア哲学は合理主義的な企てとして始まったものの、神秘主義のなごりをも留めていた、とポパーは言う。また、その論争は、中世には、スコラ哲学対神秘主義という形で表われた。更に、十七、十八、十九世紀に、合理主義、主知主義、唯物論が最高潮に達した時、それらに対抗するための論陣が非合理主義者によって張られたのである。彼らは、合理主義の限界を指摘し、その不遜な要求と危険を暴露することによって、神がかりの非合理主義への道を開いたのである。

疑いもなく、ポパーは合理主義の側に立っている。しかしまた、彼は、行き過ぎた合理主義はそれ自体の立脚基盤を掘り崩し、非合理主義者の反動を助長することになり易い、ということを指摘する。行き過ぎた合理主義、即ち、理性の限界を認めようとしない無批判的な合理主義 (uncritical

rationalism) は論理的に維持不可能な代物である。無批判的合理主義者の主張を要約すれば次の様になる。

私は、論証や経験という手段によって防御し得ないいかなるものをも受け容れる用意がない。

この原則自体を論証や経験の助けを借りて正当化することはできない。だとすれば、無批判的な合理主義は、その論理上の矛盾故に瓦解する。全ての論証は何らかの出発点を必要とするのである。

合理主義者は論証や経験を重視する。しかし、いかなる論証もいかなる経験も、論証や経験を重視しようとする合理主義的な態度を打ちたてることはできないのである。（或いは、いかなる論証や経験も、合理主義的な態度をとろうとしない人を、合理主義者に変えることはできないのである。）合理主義的な態度をとろうとする人は、意識的な決断もしくは無意識の内の理性への信頼に基づいて、そうしているのである。理性への信頼それ自体を論証によって合理化することは不可能である。

無批判的合理主義は論理的に維持不可能であるのに対して、非合理主義は同種の困難に陥らないが故に、無批判的合理主義は非合理主義によって打ち倒されてしまう。しかしながら、そうだからといって人は必然的に非合理主義者にならねばならない、というわけではない。理性を信頼し、論証や経験を重視しようとする決断することも可能なのである。かくして、可能な選択肢は、理性への信頼という決断を立脚基盤とする批判的合理主義と、非合理主義の二つということになる。

* * *

批判的合理主義をとるか、それとも非合理主義をとるかは、ある意味では道德上の決定である、とポパーは言う。なぜなら、いずれを採択するかについての決定は、社会生活上の諸問題に対する我々の態度全体に深甚な

影響を及ぼすからである。

理性に基づく論証によって、いずれを採択すべきかを決めることはできない、というのがポパーの基本的な考え方である。だからといって、そうした決定に際して理性は何の役割をも演じることができない、というわけではない。批判的合理主義の採択にはいかなる帰結が伴っているのか、そしてまた、非合理主義の採択にはいかなる帰結が伴っているのか、を注意深く分析することは、二つの選択肢の間での決定を為すに際して大いに助けになるからである。盲目的に決定するのではなく、それぞれの帰結を明晰に心に思い浮べた上で決定できるようにする、という点に於いて理性はその役割を演じることができるのである。

ポパーは非合理主義の帰結の分析から始める。彼の強調する非合理主義の第一の帰結は、それが究極的には暴力を招来せずにはおかない、ということこれである。非合理主義者は人間の行動の原動力としての情動 (emotions) や熱情 (passions) を強調する。この主張それ自体には何ら問題はない。しかしながら、その主張が、理性の力によって情動や熱情を矯正することはいかなる程度に於いても不可能である、という主張と結び合う時、それはポパーが断固として拒絶するものとなる。理性に何らの重要な役割をも見い出そうとしない人は、精々の所、人間の非合理的な本性に対して何らかの対策を講じることを諦めてしまった人であり、悪くすると、人間理性そのものを嘲笑する人である。そうした人にとっては、争い事にけりをつけるための方法としては、ただ暴力による決着が残されているのみである。

第二に、非合理主義は容易に反平等主義と結びつく、とポパーは言う。我々は誰に対しても同じ情動を感じることはできない。我々は「抽象的に」何かを愛することはできず、我々のよく知っているものしか愛せないからである。従って、愛や同情といった情動でさえ、人類を異なった範疇に分ける方向へと向かってゆく。人が憎しみや嫉妬といった情動を抱く時、この区分は更に鮮明になり、人類は敵と味方に分類され、或いは支配すべき

者と支配されるべき者に分類されてゆく。そして、この支配—被支配の関係は、ポパーが最も嫌うもののひとつなのである。

* * *

理性は二重の役割を果す。それは、非合理主義の帰結がいかなるものとなるか、を我々に示してくれる。他方、それは、少なくともポパーが好ましいものではないと考える非合理主義の帰結を修正し緩和するのに役立つ。

先に、非合理主義は容易に暴力や反平等主義と結び付く、ということを目指した。この点についてもう少し考えてみよう。愛そのものは公平を促進もしなければ、闘争を鎮めることもできない、ということを示すために、ポパーはひとつの無害なテスト・ケースを吟味している。

- (1) トムは芝居が好きである。
- (2) ディックはダンスが好きである。
- (3) トムはディックが好きであり、ディックもトムが好きである。

このような場合には、トムは相手のことを思いやってダンスに行こうと主張し、他方、ディックはトムの好みを尊重して芝居を見に行こうと提案するかもしれない。相手に対する愛が大きければ大きい程、そしてまた、相手の好みを満たしてやろうとする気持が強ければ強い程、二人の主張に決着をつけることは難かしくなるだろう。解決策はふたつしかない。ひとつは、あくまで情動に訴えてゆく方法である。しかし、この方法は、お互いの愛情が大きければ大きい程、最後には暴力に到り易い、という皮肉なものである。いまひとつの方法は、理性に基づいて、筋の通った (reasonable) 妥協に達するというやり方である。

批判的合理主義の信奉者は、理性の力を借りて、あくまで情動に訴えてゆくということがいかなる帰結をもたらすか、を知ろうとし、また、そう

したことの帰結が好ましいものではないと感じたならば、再び理性の力を借りることによって、相互に許容可能な解決策を探ろうとするのである。

* * *

先のトムとディックの間の争いは、むしろほほえましいぐらいのものである。しかし、愛する人を幸福にしたいという気持ちが嵩じて、人民を幸福にするという政治理想に到るならば、それは非常に危険なものとなる。こうした政治理想の持主は、往々にして、人民の欲していることが何であるかを知っていると考え、或いはまた、たとえ人民が欲していなくても人民を真に幸福にするものが何であるかを知っていると考え勝ちである。彼が人民の欲していることを知り得るか否か、は大いに疑問である。更に、彼が人民の欲求に逆ってさえも彼らを真の幸福へと導き得る、という主張はより一層疑問である。それは、自らの価値の尺度を他の人々に押しつけようとする欲求を隠すための、自己欺瞞に過ぎないのかもしれない。

何人も他人を幸福にできるなどと思いつてはならない。なぜなら、誰しも間違いを犯し勝ちだからである。間違いは他人の批判を通してしか修正されない。ポパーによれば、科学上の議論に際してと同様、道德上の決定を為すに際しても批判は不可欠なのである。かくして彼の合理主義は二重の意味で批判的である。それは、一方では、全てを論証によって合理化しようとする、理性の限界を認めない無批判的合理主義に対して批判的である。それはまた、論証や経験を重視しようと決断した後に於いても、批判が決定的に重要だと考えるのである。

II デモクラシーと社会改良の可能性

合理主義者ポパーは、「変更できない運命法則」にその身を託すことを拒絶する。彼は社会改良の可能性を信じ、その方法を探ろうとする。彼はまた、人々の間には相異なつた価値の尺度が存在することを容認し、それらの間で道理にかなつた折り合いをつける道を探ろうとする。

以上の二つの観点から、ポパーはマルクスの国家の理論を批判する。そして、彼の批判は、『自由社会の哲学とその論敵』の第十七章で展開されている。

マルクスは、国家権力はいかなる機能を果し得るかという問によりも、国家権力とは何であるかという問により一層の関心を示した、とポパーは言う。後者の問に対する解答は、国家とは階級支配の道具である、というものであった。そしてまた、それは経済組織の現実の生産諸力の上に建てられた上部構造のひとつであると解されねばならないのである。こうした国家理論に基づくならば、一切の政治は第一義的な重要性を持たないということになる。つまり、政治によって、経済の中の実在を決定的に変更することは不可能だということになる。更にまた、民主的な政府ですら、階級支配のための道具の域を脱し得ないということになる。

* * *

ポパーは以上の様な主張に異を唱える。彼の主張は次の一点に集約できる。

政治上の権力は経済上の権力を制御できる。

政治上の権力を用いて、経済的弱者に加勢すること、即ち、餓死しないためにはどんなことにも屈従しなければならない労働者に対する残酷極まりない搾取をやめさせることは、少なくとも論理的には、可能である。従って、革命を起す以外にプロレタリアートが救済される道はない、というわけではないのである。

金持ちは、必要とあれば鉄砲を買い暴力団を雇うこともできるのだから、権力を持っている、という議論は回り道した議論である。というのも、この議論は、鉄砲の持ち主が権力の持ち主である、ということを知っているからである。鉄砲を持たず、ただ富のみを所有しているものから、富を奪

い取することは決して不可能なことではない。

しかし、重要なのは次の点である。プロレタリアートに対する搾取に終止符を打つ「べき」であるのならば、経済上の権力者が政治上の権力を支配することを許してはならない、ということこれである。デモクラシーはこうしたことへの可能性を開いてくれるのである。事実、幾つかの民主主義国家に於いては、少なくとも第二次大戦以降、餓死しないためには何でもしなければならぬといった人々は存在しなくなったのである。

* *

ポパーの解釈する所に従えば、マルクスにあっては歴史主義の優勢化と共に、社会改良への道が閉ざされていった。社会制度を合理的に改良してゆくという考え方はユートピア流である、として排除されていったからである。我々に為し得るのは、精々のところ、歴史の過程に於ける産みの苦しみを軽減することだけだというわけなのである。他方、プラトンはその歴史主義に風穴をあけ、理想の国家を実現するための政治計画に道を開いたのである。しかしながら、ポパーはプラトン流の政治計画を、それが全体主義的で反人道主義的であるという理由によって、斥けている。それではポパー自身の社会改良についての見解はいかなるものなのだろうか。これについては節を改めて論ずることにしよう。

Ⅲ 漸次的社会工学

ポパーにとっての政治理想は自由主義と人道主義の二つである、と筆者は考える。各人が可能な限り自らの欲求するところを為し得ることが望ましい。しかしながら、自由は無制限なものであってはならない。なぜなら、無制限の自由は、強い者が弱い者をいじめ、弱い者の自由を奪い去り、弱い者に非人間的な生活を強いるということにつながり得るからである。各人が可能な限り自由であると同時に、何人も非人間的な生活を強いられることのない社会がポパーにとっての理想である、と筆者は考える。こうし

た理想を実現するために、ポパーは合理的な行動の必要性を説き、社会改良の方法として「漸次的社会工学」(piecemeal social engineering)を提唱する。これがいかなることを意味するかを理解するためには、①歴史主義者対社会工学者、②ユートピア的社会工学 (Utopian social engineering)対漸次的社会工学、という二組の対概念に説明を加えることが必要である。

前者から始めよう。この区別は、『自由社会の哲学とその論敵』の第三章第四節で述べられている。歴史主義者は変更不可能な運命法則に対する信仰を抱いている。それに対して社会工学者は、人間が自分自身の運命の主人である、と考える。彼は自ら目的を選定し、人間の歴史に影響を与えようとする。両者の違いは、社会制度に対する態度の違いによって、最もよく説明することができる。歴史主義者は社会制度の歴史に一層の関心を示し、その起源、発展、現在それがもつ意義や将来もつであろうと思われる意義に注目する。他方、社会工学者は、社会制度の起源や制度創設者の意図に多くの関心を払ったりせず、一定の目的を達成する上で社会制度がどれだけ有効に機能するか、に専心する。

保険制度というひとつの例をとって説明してみよう。歴史主義者ならば、保険の起源が利潤追求活動にあるのか、それとも、公共の福利を実現しようとする行為に存するのか、を解明しようとするだろう。それに対して社会工学者は、保険制度を用いて最大の利潤を上げるためにはどうすればよいかという観点から、或いは、公衆に最大の福祉を提供するためには保険制度をどのように用いればよいかという観点から、保険制度に注目するであろう。

言うまでもなく、ポパーは社会工学者の側に立っているのである。

* * *

ユートピア的社会工学対漸次的社会工学という第二の対概念に進むことにしよう。これは、『自由社会の哲学とその論敵』の第九章並びに、『歴史主義の貧困』の第二十一節～二十四節で述べられている。

ポパーによれば、ユートピア主義者の基本方針は次の様なものになる。我々が合理的に行動するためには、我々は、まず、注意深く自分達の究極の目的を選定し、それを中間的な目的（即ち、究極目的の手段）と明別しなければならない。この原則を政治の領域に適用するならば、我々は何らかの政治行動をとるに先だって、まず、自分達の究極の政治目標、即ち、理想の国家像を決定せねばならない、ということになる。そうすることによって初めて、理想実現のための最善の方法と手段を考慮することが可能になる、というわけなのである。

こうした主張はいかにも説得的であるが、それ故に一層危険である、とポパーは言う。それに対してポパーは、一步一步進んで行く方法、細切れ（piecemeal）方式を提唱する。彼が細切れの漸次的方法を採用するのは、理想の完全な実現が仮に可能であるとしてもそれははるか未来のことであり、はるかな未来に到るまでのどの世代にもそれぞれの要求とその要求を満たそうとする権利がある、と彼が考えているからである。いつ実現されるか知れたものでない「究極の」理想のために努力するよりも、現下の悪と闘い、苦難に喘ぐ人々の救済に尽力することを、ポパーは説く。この闘いは容易に多数派の支持を得るに違いない。眼前の悪を除去するための細切れ方式は誤りから学ぶことをも可能にする。ひとつの悪を除去しようとする試みがより大きな悪を招来しそうである、ということが判明した時、漸次の社会工学者は、重大な危険にさらされることなく、方向転換を為し得るのである。

ユートピア主義が成り立つためには次の二つの仮定が満たされねばならない、とポパーは言う。

- (1) 理想が何であるかを一挙に決定する合理的な方法の存在。
- (2) 理想実現の最善の手段が何であるかを一挙に決定する合理的な方法の存在。

(1)はプラトンでさえ真でないと考えている、とポパーは言う。究極目的を決定する合理的な方法が存在しないにもかかわらず、意見の相違を消滅させようとすれば、当然のことながら、暴力が招来されることとなろう。

他方、ある理想を実現するための最善の方法を「一挙に」知ることも不可能である。我々は大規模な実験からは多くを学び得ない、とポパーは言う。なぜなら、実験のどの部分がどの帰結をもたらしたかの判定は、大規模な社会変革に際しては、判読し得ないからである。更にまた、制度変革に際しては、予測もしなかったマイナスの反作用が、常に、生ずることであろう。我々は、その限界の故に、こうした反作用の全てをあらかじめ予測し尽くすことができないのである。ただ、試行錯誤の方法のみが我々の不完全さを補ってくれるのである。

* * *

ポパーは、歴史主義者の態度を拒絶し、社会工学者であろうとする。また、社会を改造するに当って、漸次的方法を提唱し、まず最初に究極の政治理想を確定すべきであるとするユートピア的方法を斥ける。しかしながら、ポパーの提唱する漸次的社会工学は必ずしも人気のある方法だとは言いがたい。それは、優柔不断な臆病者の採用する方法の如くに見える。それは常に、より重大な問題を先送りにし、その上、重大な事態に直面するたび毎に、必ずしも楽なものだとは言えない道徳上の決断を要請する方法である。そして何よりも、それは非常な忍耐を要請する方法である。

それに対して、徹底した歴史主義者は、被抑圧者に、輝く未来についての信仰を吹き込むことができるし、更に、道徳上の決断に悩まされることがない。しかし、歴史の未来を予測しようとする歴史主義者の要請は実現不可能な要請であり、その上、徹底した歴史主義は非人道的な道徳理論に道を開き得るが故に、ポパーによって斥けられる。

他方、ユートピア的社会工学の方法は、一見して、いかにも道理にかなっており、また、道徳的にもより優れた方法であるかの如くに見える。し

かし、それは、先に述べた理由によって、不可能な方法であるが故に、ポパーの斥ける所となる。だが、ユートピア的方法の真の危険を認識するためには、それに含まれるある側面に照明を当てておくことが必要であろう。妥協のない徹底論 (uncompromising radicalism) がそれである。社会悪は根元から断ち切れねばならず、邪悪な社会制度は完全に根絶されねばならない、というわけである。徹底的にやりぬこうとする態度には、人間の美的心情 (aestheticism) に大いに訴えかける所があり、そのことがユートピア的方法に非常な魅力を与えているのである。人は誰しも、つぎはぎだらけの古い衣装を何とかもたせてゆくことよりも、真新しい布で衣装を新調することを好むだろう。社会制度について同じように考えたとしても、それは無理のないことである。

だが、こうした妥協なき徹底論が人道主義的な衝動によって制御されることがなければ、それは非常に危険なものとなる。本当に美しい新世界を建設することに比べれば、個々の人間の存在は無にも等しきものとなり、彼らの生活は、美的心情によって鼓舞された理想主義者の自己表現欲求の単なる一手段になり下ってしまうのである。ユートピア主義はこうしたことを含意しているが故に、ポパーはそれを論難して止まないのである。

開いた社会を擁護しようとする者は、永久に不完全でつぎはぎだらけの社会で生き続けてゆこう、と決心しなければならない。我々は倫理的に全く不完全な存在である。理想実現のための手段に関する我々の知識は全く限られたものでしかない。しかし、疵ひとつない真に美しい世界を不可能にしているのは、これらのことにもまして、我々の住む世界には相異なった価値の尺度が存在している、という事実なのである。

開いた社会の擁護者は、種々の価値体系が存在することを、決して嘆いてはならない。しかも、彼は、そのことが暴力を帰結することがないようにするために、真剣な努力を続けねばならないのである。